

冷戦終了時までのブルガリアと日本の外交関係

小泉大使閣下

尊敬するバシカロフ日本友の会会長

尊敬する日本友の会会員の皆様

講演に移る前に、日本語・日本文化教育に関わるブルガリアの教育機関に対して日本が行ってきた多大な支援につき、日本政府の代表として、また個人として小泉大使閣下に感謝申し上げたいと思います。

我々が入手できる確かな情報によると、ブルガリアを初めて訪れた日本人は、露土戦争の観戦武官である山沢静吾氏であります。プレヴェンにて山沢氏はトルコ兵との戦いに参加します。これは、ロシア皇帝からの勲章に値するものです。これは、著名な日本のブルガリア研究者寺島憲治氏によって示されています。私は、我々が歴史を認識していると示すため、感謝を表すため、彼の後継者を探す責務があると思います。

1906年日本の作家徳富蘆花は、レフ・トルストイに会うためエルサレムからロシアを訪る際、ブルガリアを通りました。彼の日記には、日本の知識人による初めてのブルガリアの印象が書かれていました。興味深いのは、徳富蘆花の短編「灰燼」に描かれている社会プレセスが、エリン・ペリンの短編「トビ」に描かれているそれとかなり似ているということです。

ブルガリアと日本の外交関係の礎は、1927年、通商と最適国条項に関する公式文書の交換によって築られました。

1939年にソフィアで日本の公使館が開設され、12月28日に蜂谷輝夫駐ブルガリア公使はボリス王に信任状を提出しました。ブルガリアは1942年5月に東京に公使館を開設しました。ブルガリアの初代公使にはヤンコ・ペエフが任命され、9月10日に当時の裕仁天皇陛下（昭和天皇）に信任状を捧呈しました。公使館にはブルガリアの有名な作家スベトスラフ・ミンコフも配属されており、自身の著作で、日本語と日本文化への大変興味深い考察を示されています。1943年2月11日、ペエフ・ブルガリア公使及び谷正之日本国外務大臣は、友好・文化協力協定に署名しました。同年ペエフ公使の後任としてスタン・ペトロフ・チョマコフ氏が任命され、公使館が正式に閉館になる1945年1月8日まで公使を務めました。

1945年から1959年までブルガリアと日本の外交関係は続いてはいませんでしたが、

私は、このことは、ブルガリア国民の日本に対する伝統的な良い関係に何の影響も与えなかったと強調したいと思います。これは、冷戦の暗黒時代においてもブルガリアで反日本のプロパガンダがなされなかったことから言えるでしょう。

1959年太田三郎在ポーランド日本国大使及びフリスト・ボエフ在ポーランド・ブルガリア大使は、自国政府よりブルガリアと日本の外交関係再開の交渉を開始する全権を委ねられました。交渉は1959年9月12日の共同コミュニケの署名で成功裏に終了しました。両国は全権公使レベルの外交団代表を交換することを決定しました。

1960年ブルガリアは東京に公使館を開設し、フリスト・ボエフを全権公使に任命しました。日本は最初はソフィアに公館を開設せず、在ユーゴスラビア大使が在ブルガリア大使を兼任することにしました。この状態は、両国に設置される公館のレベルが大使館となる1964年まで続きました。初代在ブルガリア日本国大使には、高橋通敏氏が任命され、在日本ブルガリア大使には、フリスト・ズドラフチェフが任命されました。

1966年にはブルガリアの偉大な友人である東海大学総長の松前重義教授がソ連及び東ヨーロッパ諸国との文化交流のための組織を創設しました。彼の招待で、国営ラジオ児童合唱団は、指揮者のフリスト・ネデヤルコフ氏とともに1967年7、8月に日本での初めてのコンサートツアーを実現させました。ネデヤルコフ博士の4つの曲は、日本語に訳され、小学校の歌の教科書に掲載されています。松前重義教授の二国間関係緊密化への貢献は大きく、それだけでも本になるほどです。

第二次世界大戦終了後の日本の早い回復、驚くほどの経済成長、科学技術分野の進展は、1962年の英国「エコノミスト」の記事で初めて「日本経済の奇跡」と表現され、その後2回にわたり掲載されました。

60年代から80年代のブルガリアの政治・経済のエリート達もまた、日本経済の奇跡に深い感銘を受けました。トドル・ジフコフは、首相として1970年に、その後国家評議会議長として1978年、1985年と3度日本を訪れました。特に記念すべきは、1970年の最初の訪問です。彼は社会主義国の要人に向けての手記で特に高度技術分野において日本の例から学ばなければならないと書きましたが、その唯一の反応は、ジフコフ氏は日本の影響下に陥ってしまったというレオニド・ブレジュネフ側からの厳しい批判でした。

ブルガリアと日本が異なる社会・経済システムに属していることによる困難にもかかわらず、あらゆる日本の会社はソフィアに代表部を設け、80年代には、二国間の経済関係は

最盛期を迎えました。これは、ブルガリアの経済・政治エリートの中で突出した人物でもあった歴代の在日ブルガリア大使の尽力によることは疑いようもありません。

ブルガリアは科学技術の発展における日本の経験を取り入れようと特別の注意を払いました。松前重義教授のおかげで、1970年には、科学・技術促進・高等教育機関と東海大学間で科学技術協力協定が署名されました。このようにブルガリアの学生の日本での教育機会が開かれていったのです。当時通商・産業大臣で、後に首相となった中曽根康弘氏は、1974年のブルガリア訪問時に、ブルガリアにとって大事な分野における教育と研究に10の奨学金を保証するという約束をしています。

1979年は、ブルガリア・日本の関係の発展と二国間パートナーシップの強化という点で重要な年です。この年、当時の皇太子であられた明仁皇太子殿下、美智子皇太子妃殿下（現在の天皇陛下、皇后陛下）が日本を訪問されました。

1983年には、現在の日本の安倍晋三内閣総理大臣の父である安倍晋太郎外務大臣（当時）がブルガリアを訪問されました。これは、日本の外務大臣のブルガリア初訪問になります。1987年には三笠宮殿下が、1988年には金丸副総理がそれぞれ訪問されました。

日本大使館が発行しているブレティンの記述を中心に安倍総理の発言を注意深く見ていると、恐ろしい地震や福島での事故からの復興だけではなく、日本経済全体への新しい刺激を生み出すことへの彼の決意を深く感じます。

冷戦期のブルガリアと日本の活発な二国間関係は1989年以降の我が国における政治的変革の後における協力関係の確固たる基礎を生み出したことに言及して、講演を終えたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。